

椎の苗木通信



夢・力・花いっぱい

木城町立木城中学校

Tel 0983-32-2028

Fax 0983-32-4191

木城の明日を担う心豊かでたくましい人づくり

(木城町教育大綱の基本理念)

国語の特別授業

1年生を対象に、2月5日(月)5校時、多目的室で国語の特別授業がありました。講師は、アーサー・ビナード氏でした。本人が日本語に触れて、これまで感じていたことやご自身の思いをお話されました。

アーサー氏の話の中で、ウォルト・ディズニーカンパニーから「It's a small world.」を歌詞に合う絵本を作ってもらいたいと依頼があり、制作されたことを紹介されました。

生徒たちは、アーサー氏の流暢な日本語に聞きほれて、日本のことをよく知り尽くされていると感動していました。



立志式

2月9日(金)は、参観日であり、2年生は立志式が体育館でありました。生徒一人一人が色紙にこれからの自分の夢や志を漢字一文字に表し、発表しました。



生徒の発表を出席された保護者や来賓の方々が聞き入っておられました。この日の志を今後の学校生活に活かしてもらいたいと思います。

後半は、橋本 淳二氏によるクラウン(道化師)の演技と講話がありました。講師の思いが話の中で如実に表れており、生徒はよく耳を傾けていました。

子どものよさを認める

私の教え子にA男がいました。学力はそれほど優れていませんでしたが、こつこつと勉強をする子でした。掃除や当番などは、友達が遊んでいても、黙って自分なりにしていく子でした。しかし覇気がなく、自信がなく、積極的に物事に取り組むことが少ない子でした。

A男の2つ下の妹がいました。彼女はA男と違って、明るくはきはきとした子でした。友達も多く、運動場でもみんなをリードしていくような子でした。積極的であり、どちらかというA男と

反対の性格でした。

私はとても気に入り、母親と話す機会を持ちました。母親は開口一番、「A男は、本当に困った子です。いつもぐずぐずしています。妹は、兄と違って、いつもはきはきして私の言うことをよく聞きます。先生もきっとA男のことでお困りでしょうね」と言われるのです。

私は、A男の学校の様子について話しました。黙ってこつこつと学習をしていること、一生懸命に掃除や当番の仕事をしていること、友達が少ないが、とてもやさしいことなど、A男の良いところを話しました。しかし、母親はそれを認めようとはしません。どうも妹は母親似であり、母親の期待通りに育っているのでしょう。口には出せませんが、兄は母親の嫌いなタイプだったようです。A男は一生懸命に取り組んでいるのに母親には認めてもらっていないようです。

そこで、私は、母親に、A男は妹と違った面ですばらしいことがあることを話しました。そして、兄妹であってもそれぞれ個性があり、よさがあり、それを生かすことが何よりも大切であることを話しました。そしてA男を伸ばすには、A男のもっているよさを親が理解してやり、心から認め、ほめてほしいこと、家庭がA男にとって温かみのある場所になるようにしてほしいとお願いしました。

その後、学校でのA男の様子が変わってきました。少しずつですが自信を持つようになりました。

ご家庭でも、子どもさんの様子をよく観ていただき、何かその子のよさを見出し、その子のよさを理解し認め、ほめてあげていただければと思います。

[鎌野健一氏の話から]

全校集会での校長先生のお話から

➤ 3/1(木)の全校集会で、矢野校長先生がお話をしてくださった内容を以下に記します。

【 あるレジ打ち女性の話 】

その女性は、何をしても続かない子でした。

田舎から東京の大学に来て、部活やサークルに入ったのは良いのですが、すぐにイヤになって次々と所属を変えていくような子だったのです。

そんな彼女にも、やがて就職の時期が来ました。最初、彼女はメーカー系の企業に就職します。ところが仕事が続きません。勤め始めて3ヶ月もしないうちに上司と衝突し、あっという間にやめてしまいました。

次に選んだ就職先は、物流の会社です。しかし入ってみて、自分が予想していた仕事とは違うという理由で、やはり半年ほどでやめてしまいました。

その次に入った会社は、医療事務の仕事でした。しかしそれも『やはりこの仕事じゃない』と言ってやめてしまいました。そうしたことを繰り返しているうち、いつしか彼女の履歴書には、入社と退社の経歴がズラッと並ぶようになっていました。すると、そういう内容の履歴書では、正社員に雇ってくれる会社がなくなってきました。

ついに、彼女はどこへ行っても正社員として採用してもらえなくなりました。だからといって生活のためには働かないわけにはいきません。田舎の両親は早く帰って来いと言ってくれます。しかし、負け犬のようで帰りたく、ありません。結局、彼女は派遣社員に登録しました。ところが、その派遣も勤まりません。すぐに派遣先の社員と

トラブルを起こし、イヤなことがあればその仕事をやめてしまうのです。彼女の履歴書には、やめた派遣先のリストが長々と追加されていました。

ある日のことです。新しい仕事先の紹介が届きました。それは、スーパーでレジを打つ仕事でした。ところが勤めて1週間もすると、彼女はレジ打ちに飽きてきました。ある程度仕事に慣れてきて、『私はこんな簡単な作業のためにいるのではない』と考えだしたのです。その時、今までさんざん転々としてきながら我慢の続かない自分が、彼女自身も嫌いになっていました。

もっとがんばるか、それとも田舎に帰ろうか。とりあえず辞表だけ作って、決心をつけかねていました。するとそこへ、お母さんから電話がかかってきました。また田舎に帰ってくるよううながされ、これで迷いが吹っ切れました。彼女はアパートを引き払ったらその足で辞表を出し、田舎に戻るつもりで部屋を片付け始めました。

長い東京生活で、荷物の量はかなりのものです。あれこれ段ボールに詰めていると、机の引き出しの奥から手帳が出てきました。小さい頃に書き綴った自分の大切な日記でした。無くなって探していたものでした。

そして日記をパラパラとめくっているうち、彼女は、『私はピアニストになりたい』と書かれているページを発見しました。そう、彼女の小学校時代の夢です。『そうだ。あの頃私は、ピアニストになりたくて練習を頑張っていたっけ』と、彼女はあの時を思い出しました。彼女は心から夢を追い掛けていた自分を思い出し、日記を見つめたまま、本当に情けなくなりました。

『あんなに希望に燃えていた自分が今はどうだろうか。なんて情けないだろう。そして、また今の仕事から逃げようとしている…』

彼女は静かに日記を閉じ、泣きながらお母さんに電話したのです。『お母さん、私、もう少しここでがんばるね』彼女は用意していた辞表を破り、翌日もあの単調なレジ打ちの仕事をするために、スーパーへ出勤して行きました。ところが『2、3日でもいいから』と頑張っていた彼女に、ふとある考えが浮かびます。

『私は昔、ピアノの練習中に何度も何度も弾き間違えたけど、繰り返しているうち、どのキーがどこにあるのか指が覚えていた。そうなったら鍵盤を見ずに、楽譜を見るだけで弾けるようになった』彼女は昔を思い出し、心に決めたのです。

『そうだ、私は私流にレジ打ちを極めてみよう』と。そして数日のうちに、ものすごいスピードでレジが打てるようになったのです。すると不思議なことに、それまでレジのボタンだけ見ていた彼女が、今まで見もしなかったところへ目が行くようになりました。

最初に目に映ったのはお客さんの様子でした。

『ああ、あのお客さん、昨日も来ていたな』
『ちょうどこの時間になったら子ども連れで来るんだ』とか、いろいろなことが見えるようになったのです。そんなある日、いつも期限切れ間近の安いものばかり買うおばあちゃんが、5,000円もする尾頭付きの立派な鯛をカゴに入れてレジへ持ってきたのです。彼女はビックリして、思わずおばあちゃんに話しかけました。『今日は何かいいことがあったんですか?』

おばあちゃんは彼女に、にっこりと顔を向けて言いました。『孫がね、水泳の賞を取ったんだよ。今日はそのお祝いなんだよ。いいだろう、この鯛』

『いいですね。おめでとうございます』

うれしくなった彼女の口から、自然な言葉が飛び出しました。お客さんとコミュニケーションをとることが楽しくなったのは、これがきっかけでした。いつしか彼女は、レジに来るお客さんの顔をすっかり覚えてしまい、名前まで一致するようになりました。

『〇〇さん、今日はこのチョコレートですか。でも今日はあちらにもっと安いチョコレートがでていますよ』『今日はマグロよりカツオのほうがいいわよ』などと言ってあげるようになりました。レジに並んでいたお客さんも応えます。

『いいこと言ってくれたわ。今から替えてくるわ』そう言ってコミュニケーションをとり始めたのです。彼女はだんだんその仕事が楽しくなってきました。

そんなある日のことです。『今日はすごく忙しい』と思いながら、彼女はいつものようにお客さんとの会話を楽しみつつレジを打っていました。すると店内放送が響きました。『本日は大変に混みあいまして申し訳ございません。どうぞ空いてるレジにおまわりください』ところがわずかな間をおいて、また放送が入ります。『本日は混みあいまして大変申し訳ありません。重ねて申し上げますが、どうぞ空いているレジのほうへお回りください』そして三回目、同じ放送が聞こえ

てきた時に、はじめて彼女はおかしいと気づきました。そして、ふと周りを見渡して驚きました。

どうしたことか5つのレジが全部空いているのに、お客さんは自分のレジにしか並んでいなかったのです。店長があわてて駆け寄ってきます。そしてお客さんに『どうぞ空いているあちらのレジへお回りください』と言ったその時です。

お客さんは店長の手を振りほどいてこう言いました。『放つといてちょうだい。私はここへ買い物に来てるんじゃない。あの人としゃべりに来てるんだ。だからこのレジじゃないとイヤなんだ』

その瞬間、彼女はワッと泣き崩れました。その姿を見て、別のお客さんが店長に言いました。

『そうそう。私たちはこの人と話をするのが楽しみで来てるんだよ。今日の特売はほかのスーパーでもやってるよ。だけど私はこのお姉さんと話をするためにここへ来てるんだ。だからこのレジに並ばせておくれよ』

彼女はポロポロと泣き崩れたままレジを打つことが出来ませんでした。はじめて、仕事というのはこれほど素晴らしいものなのだと気づいたので。そうです。すでに彼女は昔の自分ではなくなっていたのです。

その後、彼女はレジの主任になって、新人教育に携わったそうです。彼女から教えられたスタッフは、仕事の素晴らしさを感じながら、今日もお客さんと会話していることでしょう。

その後、彼女の履歴書がどうなったかは、誰も知りません。

『涙の数だけ大きくなる』 ~木下晴弘著書、フォレスト出版から~